

夢童

菅波 茂

08年3月3日にA.M.D

Aネパール支部長のレグミ医師からメールが届いた。「ネパール東部ジャパ郡にあるブータン難民キャンプで大火災が発生。死者はいないが、竹などで建てられた家屋の約9割が焼失、8000人〜1万人が住む場所を失って被災生活を余儀なくされている。冬のため、医療のみならず毛布や衣類も不足している。A.M.D.Aネパール支部は、キャンプ内診療所で負傷者を治療するとともに、生活資金の提供や毛布の配布など支援を開始した。本部の緊急支援をお願いしたい」と。5日に本部から館野和之調整員を現地に派遣し、被災調査と資金提供をした。

92年に大量のネパール系ブータン人がブータンから難民となってネパールに逃げてきた。原因は

ネパール系ブータン人による民主化運動だった。ブータンに移住してきた

ネパール系ブータン人は、チベット系ブータン人に匹敵する数であった。民主活動とは数の世界だった。危機感を抱いたチベット系ブータン人との紛争によって、ネパール系ブータン人が難民となった経緯がある。A.M.D.Aネパール支部は、難民キャンプに最初に医療チームを派遣した医療系団体だった。付近にある公立病院にはネパール支部の会員もいた。当然、難民キャンプ内の保健医療活動は、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）によってA.M.D.Aが指名されると思っていた。意に反して、ジュネーブに本部があるUNHCRはセイブ・ザ・チルドレンUKと保健医療活動の契約を結んだ。大きな問題が発生した。多くの難民たちが難民キャンプの外にある公立病院を受診したため、診療機能

ネパール・ブータン難民キャンプ大火災

がパンクして地元住民の不满が爆発した。UNHCRは難民キャンプ内しか権限が認められていなかった。A.M.D.A本部とネパール支部は、日本の外務省の資金や善意の寄付金を得て、第二次医療センターをダマック市内に開設。重傷を負った難民の治療にあたった。現在、A.M.D.Aダマック病院は地域の基幹病院として、約100床の入院のみならず看護師や検査技師の養成学校を併設するまでに成長している。UNHCRは、難民の治療に不可欠なこの病院の運営費を支援してくれている。

難を共にしたパートナーシップゆえだった。そして、世界の紛争地や災害被災地にA.M.D.A多国籍医師団を派遣する時、本部からの医師派遣要請には必ず応えてくれる偉儀さへの感謝が理由だった。

A.M.D.Aのスローガンである「救える命があればどこへでも」を実現するA.M.D.A多国籍医師団の精神は、相互扶助である。究極の相互扶助は、まさかの友が真の友である。ブータン難民キャンプの大火災は日本のメディアにほとんど紹介されなかった。それにもかかわらず、A.M.D.Aの活動を支援していただいた方々に厚くお礼を申し上げます。メディアには紹介されませんが、A.M.D.Aの活動の歴史をひもどけば、納得していただける救済活動があることを理解していただければ幸いです。

A.M.D.Aネパール支部は01年から、セイブ・ザ・チルドレンUKに代わって、ブータン難民キャンプの保健医療活動をUNHCRと契約し、全面的な責任を担い、活動している。死者ゼロにもかかわらず、本部から館野和之調整員を派遣したのは、92年から16年にも及ぶ困

(A.M.D.A代表)